

「県政タウンミーティング」会議録

テーマ

「多文化共生社会の実現～外国籍県民の自立と社会参加について～」

日 時 平成26年2月4日（火）午後6時から午後7時30分まで

場 所 飯田市松尾公民館（飯田市松尾城4012-1）

参加者 知事及び外国籍県民等34名

目 次

1	知事 あいさつ	1
2	意見交換	2
3	知事 結びのあいさつ	24

1 知事 あいさつ

【長野県知事 阿部守一】

こんばんは。今日の県政タウンミーティングは、外国籍の皆さんと、率直な意見交換をさせていただく場ということで設定をさせていただきました。皆さんそれぞれお忙しい中、こうしてお集まりいただきましたこと、まずは御礼申し上げます。

私も知事になってから、なるべく県民の皆様方から直接いろいろなお話を伺おうということで、お昼を食べながらのランチミーティング、お茶を飲みながらのティーミーティング、それに今日のようなタウンミーティングということで、できるだけ県庁の外に出て、いろいろな方の声に耳をすませて、私のやらなければいけないことを考えようということで取り組んできています。

このタウンミーティングは、就任してから、今回で 37 回目になります。いろいろなテーマあるわけですが、今日は是非参加された皆様方から率直な長野県に対する思いとか意見などをお願いします。あるいは、私は皆さんに「しあわせ信州創造プラン」の冊子をお配りさせていただいております。これは、昨年 4 月にスタートさせた新しい県の総合 5 年計画ですが、基本目標は、「確かな暮らしが営まれる美しい信州」としています。「確かな暮らし」ということに込めている私の思いは、やはり私も一人の人間として日々の暮らし、安心感をもって、そして、安全な暮らしをしていきたいなと思っていますし、加えて、今日より明日、明日よりあさって、未来に向けて希望を持てる、そういう社会にしていきたいと思っています。そうした思いを、「確かな暮らし」ということに込めさせていただいております。また、長野県が目指す方向性のいくつかその中に掲げさせていただいております。その中の一つに掲げたように、「誰にでも居場所と出番がある」長野県にしたいなと思っています。外国籍の皆さんは、長野県内に約 3 万人の方がお住まいになられています。長野県はご存じのとおり、平均寿命が日本で一番長い。日本で一番長いってことは、世界でもトップクラスの長寿地域だと思います。そういう意味で、お年寄りの皆さんも今元気な方多いですし、年をとった方でも、若い方でも、あるいは、今日は比較的女性の方多いですが、やはり男性も女性も、それから、障がいを持っている方も大勢いらっしゃいますけれども、障がいがある人もない人も、そして、外国籍の皆さんも、日本人も、全ての長野県に暮らされる人たちに居場所があって、そして活躍の出番がある。そうした長野県をつくっていきたいというふうに思っています。私はずっと言っていますけれども、行政だけでできることというのは、本当に限界があります。県政のトップがこんなことを言てはいけないかもしれませんが、私ができることや県の行政ができることは限界があります。例えば、長野県をもっと元気にしようねって言った時に、やはり例えば個々の企業がもっと元気になってもらわなければ、我々行政が税金から補助金を出しているだけでは、世の中は元気にならないわけです。教育も、学校だけが、先生だけが頑張っているだけでは、よ

くならないわけで、やはり家庭であったり、地域であったり、そしてもちろん我々行政も、しっかり一緒になって取り組んでいくということが大変重要だというふうに思っています。そういう意味で、タウンミーティングの時は、いつも私は、冒頭に言わせていただいていることは、「あちら側こちら側やめましょう。」という話です。大体私が一人で立って、皆さんがあちら側にいて、なんか私は要望を聞く人で、皆さんは言う人というようになりがちです。だけど、さっき言ったみたいに、私だけでできることは限られていますし、そこの計画にも、なんか後でちょっと見ていただければ分かりますけれども、少子化対策をして、子供を産み育てやすい社会にしましょうという時に、一人で子供を産むわけにはいかないので、やはり近所の皆さんがお互い支えあってもらったり、あるいは、結婚の紹介してもらったり、そういうことが必要だというふうに思っています。私がやれることももちろんありますし、県民の皆さんにやっていただくこともあります。是非、双方向の対話にしていきたいということで、あちら側こちら側やめましょうということをついつも申し上げています。今日は、私も輪の中に加えていただいていますので、是非一緒になって暮らしやすい長野県どうすれば作れるか、考えていく場にしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

2 意見交換

(以下、進行発言は一部省略します。)

【参加者】

日本に来て、来月 24 年になります。ブラジル生まれなのですが、日系の 3 世です。長野県では、21 年目になります。長野県へ来てから、いろいろなボランティア活動なり、こういう日本の国民の懸け橋っていうことをいろいろ今までやってきました。

今日は、いろいろ話したいことあるのですが、まずは、言いたいことは、やはりこういう経済的の、これ日本だけじゃなくて、世界中で経済が少しおかしくなったことを、やはり私たちの仲間も、長野県には多い時には、平成 12 年に 2 万人いました、ブラジル国籍の方。そしたら、去年平成 24 年に 6,200 人ぐらいに減りました。これやはりこれ派遣切りというんですか、仕事がなくなった方が結構多くいます。そしたら、帰る人は帰りました。やはり派遣っていうのは今までそういう派遣会社が親代わりで、いろいろなことで外国人の面倒を見たり、いろいろなことやった中で、知らないうちにその仕事がなくなったんですね。足がないとか、仕事を探しても、仕事に行く方法もないから、大体そういう企業さんが使ってくれないようなことが結構ありました。そのことを考えて、私だけじゃなくて、長野県の中の 8 都市で、私のようなブラジルの人たち、1,700 人の署名を集めて、長野県の警察へ、運転免許証がポルトガル語でも受験できるようにお願いをしまして、平成 25 年 7 月から、ポルトガル語と中国語でも長野県の中で試験を受けられるようなことはできました（英語での受験は、それ以前から可能でした）。それが 1 つですね。

また次は、高齢者社会の中で、農業では、私が調べたところで、長野県には確か1万7,000ヘクタールの寝かしている農地（遊休農地）があったのです。農業は、私たちにもやれるような道があればいい、それをやって、いくらか農家のようなことができたなら、自分も少しやっているんですけど、8年間寝かした土地を私たちは借りて、また食べ物を作るような状態にもっていくのは素晴らしいことかなって思いながら、私だけじゃなくて、そういう人を増やしていけば、これは日本のためにもなる。私たちのためでもあるのではないかと思います。それと、介護の仕事とかね、道があればいいです。

昔からブラジルに「魚をもらうのではなく、釣り方を教えてもらいたい。」ということわががあります。お腹が空いた時に魚をあげると、その魚食べたら、その時はお腹いっぱいになるじゃないですか。でも、やはり釣り方を教えてもらいたいんですね。そしたら、自分の力、自分の頑張りで安心、安全に暮らすような環境ができるのではないかと思います。

【参加者】

私は日本での小中学校や高校で頑張ってきたことや夢を話させていただきます。

私は1歳ぐらいに日本に来て、愛知に住んでいたのですが、すぐに日本の学校に入るのではなく、ポルトガル語が勉強できるブラジルの学校に入りました。あることをきっかけに飯田市に引っ越してきて、小学校1年生、6歳の時に日本の学校へ入学しました。正直、小学校1年生に入った時は友達もいなくて、日本語もあまり上手ではありませんでした。その中ですごく大変だったこともたくさんあったり、友達を作るにあたっての困難や壁だったり、様々なことがあったのですが、その中で一番自分の力、自分の励みになったのが、小学校にある日本語教室という教室でした。その日本語教室は、自分はブラジル出身ですので、ポルトガル語の勉強をしたり、または、その時は日本語が分からなかったので、日本語のできるブラジル人の先生を呼んでもらい、勉強を一緒にして、ここまで来ることができました。中学校も無事に入学をし、たくさんの友達ができ、部活にも入り、今、高校で勉強をしています。高校では、やはり日本語とかもうまく話せるようになったこともあり、または、日本の文化やブラジルの文化、それぞれの違いが段々分かるようになってきたので、友達とかを通したり、周りの人たちともう少し分かり合えたのではないかなというふうに思っています。高校を卒業したら、4年制の大学に入学をします。無事に合格して、将来は、自分はブラジルの国籍を持ちつつ、日本でお仕事をして、日本の文化とブラジルの文化と一緒にお互いのより良いものを一緒にして、何か1つのことを一緒に取り組めたらいいなというふうに思っています。

【参加者】

ブラジル籍児童生徒支援員ポルトガル語担当です。日系2世のブラジル人で、来日して22年になります。

ブラジルの子供たちの支援員として始めたのは1997年で、17年目になります。

現在 12 の小中学校を訪問しています。それと、定時制高校を週 2 回。主にして
いる内容が、授業に入って学習の支援、保護者への便りの翻訳と懇談会の通訳。
今では、多くの児童生徒、その保護者も日本での高校、大学の進学を考えるよう
になってきていますが、日本語の習得、学習言語の習得、習慣の違い、壁はたく
さんあります。今私が訪問している日本語教室の加配のある小学校が 4 校です。

この教室の重要さを日々感じています。子供たちの日本語の習得は早いです。
来日して半年で、日常生活の会話ができるようになっていきます。それと、心の安
定感です。日本語教室の先生が、外国籍の子供たちの状況を把握しているため、
私たち側からの支援もやりやすい。保護者との連携もとれて問題が少ない。外国
籍の子供たちの教育について体制が整ってきたことに感謝します。ありがとうございます。
日本語教室が設置されていない学校が、外国籍の子供たちに関心がない
わけではありません。日本人の子供たちと同じように学力をつけようと努力され
ている先生も多くいます。しかし、限られた時間の中ですので、個別指導には限
界があります。それと、家ではポルトガル語、学校では日本語。日本人の家庭で
は当たり前に使われている言葉、例えば、理科の授業中に出て来る「沸騰する」と
か「液体」。その語彙が分からないため、次のステップには行けない。つまり、
理解が得られない。語彙の少ないため、教科学習について行けない現実がありま
す。日本語習得の他に、宿題ができない。親には教えてもらえない。どうせ親が
分からないので、宿題しなくてもよいという子供が気になります。学力向上には、
家庭学習が大切だと思います。それには、放課後の復習の支援が必要だと思います。
また、外国籍の保護者にもっと教育の大切さを知ってもらい、学校に全て任せたり、
要望したりするだけでなく、もっと学校に気楽に足を運び、協力を求めてい
く取組も必要だと思います。それと、中学校に上がった時、日本語教室がなかつた
り、支援が減らされていたりで、戸惑う生徒が目立ちます。日本人の生徒にも難
しい専門的な学習用語。授業を受けても意味の分からないまま過ぎている時間。
学校がつまらなくてやめてしまう生徒もいます。また、高校へ進学の話になると、
高校を諦めざるを得なくなってしまう。

今の状況を見ていると、小学校から上がっていった時の中学校、高校での継続
した支援体制が必要だと感じています。また、日本語も母語も、どちらも習得で
きない子供が目立ちます。家庭での親とのコミュニケーションをはかるために必
要な母語も大事にしてほしいと思います。

私は、前の発言者を小学校 1 年生から見てきています。とても明るくて積極的
で、おしゃべりが大好きな児童でした。小学校では日本語教室に来ていたため、
様子をよく分かっていました。小学校の高学年から中学校へ、段々と自分で頑張
れるようになってきました。また、ご両親も教育熱心で、それが大きな支えにな
っていると思います。お家でポルトガル語をとっても大事にされています。彼女
なりにブラジル人の心、そして日本人の心を理解して、上手に自分の個性を生か
しています。これから、互いの文化の良さを伸ばして行ってほしいです。この先、
一人でも多くの子供たちが育って行ってほしいと思います。そして、将来、ブラ
ジルと日本の懸け橋になる人材になっていってくれることを期待しています。未

来を生きる子供たちに日本語もポルトガル語も学べる環境が必要になってきています。よろしくお願いします。

【長野県知事 阿部守一】

3人の皆さんありがとうございました。

最初の仕事の話で、長野県の有効求人倍率は、やっと1.00倍まで去年の段階で上がってきていますが、ひとところに比べると、やはりまだまだ就職全体的に厳しい環境が、やっと求人と求職がバランスするところまで戻ってきているのですが。ただ、外国籍の皆さんにとっては、多分日本人以上に厳しい問題があるのではないかなというふうに思っていて、お話を伺っていました。

農業については、長野県には遊休農地がいっぱいあって、もう少し集約化して、効率化農業をやっていかうということで、今、随分政策も転換点になっていますので、農村地域の農業政策ですとか、農作物を使ったいろいろな加工などの6次産業化とか、これから県としても力を入れていきますし、産業として伸ばしていきたいというふうに思っています。今お話を伺っていて、是非そういうところで活躍していただけるような仕組みを考えなければいけないなということを感じました。

仕事の話は、今日お集りの方々も仕事大変だとか、仕事困っているというお話もあるのではないかと思います。先ほどの派遣の話は、日本人も同じ問題があると思いますし、また仕事の話で、課題があるという方は是非教えていただければと思います。

それから、2番目の方は大学行くのは決まったのですね。おめでとうございます。是非日本とブラジルの良いところを身につけて、両国をしっかりと繋げる役を果たしていただければなと思います。

最後の教育の話では、少し遠慮されて話されているのではないかという気がするのですが。もっとこういうところ変えて欲しいとか、ここが問題だということがあれば、言っていただければありがたいなと思います。

冒頭に言ったように、私が水戸黄門のように印籠をかざしてこれで終わりっていう話にはならないので、仕事の話で、これ課題だよというふうに思っている方は、他にいらっしゃいますか。どなたでもいいですよ。

【参加者】

私、ブラジル国籍です。今いろいろと聞いて確かに思っていたのは、外国人がもっと安定するために、主に私が思うには、3つの点が非常に大きいかと思っております。

まず1つ、日本のほとんどの法律が戦国時代と言っていいぐらいで、非常に昔ながらの法律ばかりで、今現状の日本には合っていない。特に外国人の関係で、入国管理局に関する法律と、それ以外の市町村に関する法律は、かみ合っていないところがたくさんあって、非常に難しいところがたくさん生まれてくるのです。先ほどおっしゃっていただきました派遣切りの関係では、労働基準監督署がつく

る法律は主に会社を守るのではないかというくらいの、特に派遣会社に関すると、罰則がなかったり、ほとんどの法律は効かないというところで、結局、現状の派遣切り問題ですとか、そういったものを生み出しているのではないかと考えております。

もう1つ大きく問題かなと思うのが、やはり行政と市町村の市民の連携が非常に整っていないのかなというふうに思います。やはり意見交換のこういう場は非常に僕は大切だなと思って来させていただいたんですけども、なかなかそれができる場がないですね。せっかくのキーパーソンですとか、地域のコミュニケーターです。そういった方がいれば、やはり各市役所の中の各課と話ができる。半年に1度ですとか、そういったのを外国人の皆さんのお声をお出しして、もちろん言ったこと全て変えられるわけじゃないですが、その中で変えられることが1つでもあれば、きっと少しずつ良い方向に歩いていけるのではないかなというふうに考えております。特に私が2つの市役所を見ておまして、その他に警察署の協議委員会の方にも委員となっておまして、様々なところでとりあえず入って、できるだけのことをしようとしているんですけど。そこまでたくさんの入口をもってしましても、なかなか自分の声が届かないというところが非常に残念だなというふうに思います。

【長野県知事 阿部守一】

ありがとうございます。

他の方にも発言いただいて、それで少し分野別に皆さんの御意見聞かせていただかないと時間がなくなってしまいますよね。

キーパーソンのネットワークのところは、また後で国際課長から、少し話してもらえますか。

【参加者】

私は中国の出身です。今は介護の現場にいます。この度は、介護の道にそって述べたいと思いますので、よろしく願いいたします。

山東省出身の私たちは、平成12年に家族で知人の住む飯田市へ帰国しました。初め、日本語が全く分からない私たちは、夫と共に昼間は職場で働き、夜は定時制高校に通って言葉の勉強はしてきました。職場でも学校でも、「あいうえお」も満足にできない私たちは、日本語の壁は思ったより厚く、いくつもの職場を転々とする日々を続けました。その中で私は、是非介護士になりたいと決心して、10年前からデイサービスセンターに勤めることになりました。デイサービスセンターの仕事は、送迎や入浴、トイレの介助といろいろありますが、特に帰国者のお年寄りには私がいることで、言葉が通じる安心感を持ってもらえて、「あなたがいてくれて、センターに来るのが楽しみになった。」とだけいただきました。私は日本語が上手ではないので、一般的なお年寄りには話が通じないことがあります。すると、利用者さんたちは私に身ぶり手ぶりしてくれ、まるで自分の娘のようにいろいろなことを教えていただき、本当にこの仕事を選んでよかったと満足して

います。そして、介護の仕事を始めて3年がたちましたが、利用者さんの喜んだ嬉しいことは私が幸せになり、利用者さんの悲しいことは私も悲しいと思えるようになりました。こうしたお年寄りのふれあいの中で、中国帰国者の介護現場には利用者さんに対する偏見など、様々な問題があることが気になるようになりました。そこで私は、帰国者の役に立つために資格を取って、介護の専門家になりたいと強く思い、6年前に短期大学に入学しました。介護福祉士の基本から専門的な知識まで学習はしました。幸い先生方から、授業以外の場面でも、人生として人間としての大切な生き方についてたくさんのご教訓をいただきました。恵まれた環境に感謝しています。飯田下伊那地方は、中国帰国者の方々がおよそ70世帯、230名が生活していて、2世3世を含めると、1,300名近くの方々が暮らしています。この地域には社会福祉士や介護福祉士で、中国語ができる人がまだほとんどいません。でも、施設には要介護の帰国者が1日ごとに多くなってきています。家で困って、日本語が分からず、助けも呼べない方が一人悩んで、うつ病や統合失調症になった人などがいます。介護者から言葉が分からないからと嫌がられ、何を言っても相手になってももらえなかった人もいます。5年前の研究で、帰国者約60人にアンケート調査しました。事前に入所している方々にもお聞きしたところ、話し相手もなく、施設の中で言葉が分からないために孤立していると感じている人が80パーセントを超えています。この現状を私たちはいつも念頭に置いて、早めにこれらの対策は考えていかなければならないと思います。一番大切なことは、私たちが利用者さんの心に寄り添うことだと思います。中国語で思い切り話したい。中国にいた時のように中国語のテレビでふるさとのニュースや行事を見て、仲間と話し合いたい。食事もたまに中国料理も食べたい。そんな中国帰国者の本意に考えられた介護施設が1日も早く各地に生まれてくることを心から願っています。

また、私は飯田日中友好協会に入会し、誰より帰国者のことを理解しておられる方々と出会い、そして、恵まれた環境の中で楽しく社会活動に参加できるようになりました。困った時、悩んだ時、皆さんに助けられて、話も聞いてくださいましたので、心強く生きようと思うようになりました。

平成24年に、NPO法人を設立した。その後、中国帰国者に一番必要な施設、グループホームの補助金を申請しましたが、残念ながら許可されませんでした。ショックを受けながら、県民協働・NPO課の方々にも相談し、皆さん優しく親切に貴重なアドバイスをしてくださいました。そこでもう一度、去年に地域密着認知症対応型共同通所介護施設の補助金を申請し、許可されました。中国帰国者の利用できる施設として、平成26年、羽場赤坂に小さなデイサービスセンターを開設する予定となっております。今は開設に向かって、市の使途を決定。積極的に施設見学と研修をしています。帰国者の方々が喜んで通い、地域に愛される施設を実現できるように頑張っています。そして、帰国者の入所できる施設を、1日も早く実現できるように努力を続けていきたいと思っています。御協力、御支援お願い申し上げます。

【参加者】

中国の帰国者 2 世です。10 数年、帰国者 2 世 3 世に対しても、日本語教室を開きましてやってこられました。それで、その次は、おとし、おしゃべりサロン。要するに、このサロンは、中国帰国者と地元の方々と仲良くお互いに気持ちで出し合う。一緒に同じ屋根で住んでいるならば、仲良くやっていこうという意味で、サロンを立ち上げました。結果は、あまりどうのこうのとかまだ言えるところじゃないけれども、まずまずなのかな。応援してくれる方がたくさんいらっしゃいました。

今回は、知事が多文化共生社会に対して、力になっていただけるという姿勢になっていただきまして、ここで僕は帰国者の 2 世 3 世の一つの要望というか、代わりに発言させていただきます。実は、帰国者 2 世の場合は、ほとんどもう定年になるような年齢になります。この方たちは、日本に帰って、年数はそんなに経っていません。要するに、年数が経っていない中では、年金はそんなにありません。もう退職をされた方も少なくない年齢です。1 人 1 万円未満の年金生活になっているような状況の中です。この状況の中ではね、日本の日常の生活じゃとてもやっていけないような状況です。ところがその方たちはみんなプライドを持っています。なるべく政府に負担かけたくない。何とかして仕事をしたい、少しでも稼ぎたいという気持ちでおります。ところが、今は 60 歳ではなくて 50 歳を越えれば、もう仕事が見つからないというのが現実です。2 世の場合は、僕の場合、今 50 歳ぐらい。いざ仕事を失えば、次の仕事を見つけるのが非常に難しくなってしまう。特に派遣社員とかね、その方たちは、例えば今日お仕事行かれて、その職場で一生懸命仕事している。真剣にやっているのだけれども、頭の中では、明日どうなるか、その不安が非常に重いはず。結構中年の方ね、1 年間かけて数か月しか働けない。これは非常にまずいです。今日本少子高齢化の中で、何とかして中高年を生かしていけるように、知事のお力で何とかして企業に対して呼びかけとか、そのような方法をとっていただくとありがたいことなのです。その人たちに、何とか安心して、日本に来て良い所に来たなというような実感を持たせてあげたいというような気持ちでおります。せっかく骨を日本に埋めたいという気持ちでおっても、日本で受け入れてくれないという世の中では、彼らも可哀想すぎる。何とかしてその方たちに安心して働けるような状況をつくっていただきたいと思います。お願いしたいところはそういうところなのです。今日はありがとうございました。

【参加者】

アメリカ出身で、飯田に来てもう 23 年になります。

今の方々の話を聞いて、ちょっと場違いな感じになるのですが、僕は飯田が大好きで、望んで残っています。今日のテーマの中では、社会の参加ということで、僕はいろいろ困難にはそんなに当たっていないかなという感じになりますけど。飯田に来て、日本語はある程度できていたつもりで来たのですが、来たらやはり全く周りの人たちと教科書で習っていた日本語の差はかなり大きかったの

です。そんな中、飯田に来て2か月目で、空手を始めたんです。空手に入ったことで、一般の人たちと練習中は全て日本語で行っていて、練習が終わって、やはり汗をかいた後のおいしいビールを楽しみながら話は全部日本語で、ついていくのに非常に苦労したのですが、日々練習の中で日本語も覚えて、暮らしていたアパートも、飯田の特徴かどうか分からないのですが、自治会とか組合が非常に多くて、全然そんなことも分からず、回覧板という不思議な物が回ってきて、2年目だったか3年目だったか定かじゃないのですが、その頃に地区の御輿を新しくしましたというのがあって、アパートの近くのあるホテルで、その披露会をやりますと。それを読んで、そんなものがあるならと思って、勝手に行きました。回覧板で回っていたのでいいのではないかなと思って行きました。そしたら、周りの方々が、「興味があるんですか。それなら是非来年一緒に担いでください。」ということで、「祭りバカ」ということをよく聞きますけど、文字どおりになりませぬ。お祭りに参加して。そしてたまたま住んでいる地区が、東野大獅子という日本一大きな獅子とも言われる獅子で、6年に1度「お練り祭り」をやっていますけど。ちょうどオリンピックの年の1998年に初めて参加して、今まで3回参加しています。その中で、日本語も段々増える中、仲間も増えて、日本の伝統もなかなか見られないところも触れることもできました。そして、飯田に来て、僕は日本に来て23年なんですけど、7年目に運命の方と出会って結婚して、地区を移動しました。そこで家を建てたら、組合に入らないと、という話になりました。組合に入っている方なら分かると思いますが、いろいろ役がありまして、段々順番で回って来るのですが、嫌だ嫌だと思いながら、引っ越して2年目になると班長になって、いろいろな役をやるようになって、今年は2つも。ひまわり子供委員という役と体育部の役員。地区の体育会のメンバー集めから準備などをしたりして、そういう積極的に近所の付き合いを始めたら、壮年団に是非入ってみませんかと言っていただいて、入ってもう12年になりますけど、一昨年、是非会計をお願いしますと。まあいいのではないかと快く受けたら、知らなかったら、エスカレーター式で会計が、翌年は副支部長、今年は支部長という大役を3つ忙しく持っているのですが。自分から言ったことで、やはり近所の方々も協力し、助けてくれるし、日常生活は面倒くさいっていうものもいっぱいありながら、やはりみんなと一緒にその面倒くさいことをやることは楽しくなって、地域に溶け込むっていうのですかね。みんながそれぞれ応援しながら、僕は自分1人で小さく段々その輪を広げようという感じで。今はもう1つ「支え」という友人がつくったグループですけど、国際交流を兼ねたスポーツサークルで、本当に文字どおり何か困ったことあったら、今は日本人、僕アメリカ、ブラジル、ジャマイカ、カナダ、何カ国の国籍が集まっているのですが、困ったことあったらいつでも言ってよという感じで、自分たちで小さくやっているのですが、こういう輪を段々広げながらみんなに住みやすい社会ができるかなと。僕は何と言っても、積極的に他人に助けを求めるよりは自ら出ると楽しく、少しは楽な生活になるのではないかなと思って。知事さんの方にはお願いがあるわけでもなく、みんなに頑張らましようという感じですかね。ありがとうございます。

【参加者】

出身はベトナムです。2004年来日。1年半仙台で日本語学校へ通ってから、4年間大学で漢語文学なんかを専攻しました。2010年に結婚して、飯田に住むことになりました。

今まで参加した活動を紹介させていただきます。まず1つ目は、長野県共生コミュニケーターの活動。2012年5月、長野県共生コミュニケーターの活動トークのきっかけで、様々な活動に参加しています。まず、飯田市にある日本語教室「わいわいサロン」や「和楽」で、日本語を学習したり、災害時のための日本語教室。例えば、災害ワークショップ。避難所シミュレーション。通訳ボランティア。災害多言語支援センターの設置。いろいろ参加して、非常に勉強になりました。また、医療通訳養成の講座や外国人キーパーソンのネットワーク会議、国際交流の夕べなども参加して、自国の文化も紹介しながら、各国の人を楽しみに交流事業をやって、ネットワークを持っています。また、先日、市内の小学校で、ベトナム文化を紹介し、国際の教育も努力しています。いろいろな活動に参加して、それをきっかけで、去年4月から実習生の通訳もさせていただきました。2つの活動には、去年4月から12月にかけて、子育てと日本語教室企画を通して参加しました。その活動は、日本の常識と母国の常識の違うところを思い、各国の文化と習慣の違うところを意見の交換をして、講座の組み立てがよかったと思います。様々な活動に参加してから、1つの課題は、やはり外国人として日本語の学習が非常に必要だと思います。地域に住んで、安心して自立して、安心して暮らせるように、日本語教育への精神が最も課題だと思っています。

今日のテーマ「多文化共生社会実現と、外国人県民の自立と社会参加」というテーマで、私の意見は、多文化共生社会実現のために、重要な4つだと思います。まず1つ目は、日本語の学習。飯田市にある日本語教室「わいわいサロン」や「和楽」、子育てと日本語教室のとても大切と感じます。2つ目は、異文化の交流。例えば、各国のコミュニティーをつくり、例えば、料理教室や各国の言語教室、異文化交流の教室があれば、容易になると思っています。3つ目は、外国人のためにホームページや、公告の多言語化が必要だと思います。4つ目は、相談。多言語に対応できるように、ボランティアの物流も必要です。今まで様々な支援をいただき、本当に心から感謝しております。

外国人が地域で自立して安心して暮らすように、国、県、市から支援が非常に更に必要だと思います。しかし、いくら企画があっても、外国人が集まらないことは非常に残念です、だから広報活動のあり方も考えていってほしいと思います。また、飯田市に住んでいる外国人として、最も難しいのは移動手段です。市内の移動手段であるバスや電車の本数も少ないので、なかなか外国人が集まりに参加しにくいことも課題だと思っています。

【参加者】

フィリピン出身です。平成元年に日本に来て、近所の温かさにひかれて、言葉

は関係なく、自分から進んで見て聞いて学びながら、お隣と近所付き合いをしています。

山本小学校から突然の話があって、子供たちと歌ったり踊ったり、遊びしました。それから、教育支援ボランティアをやったり、地域の運動会も必ず参加をしました。交通安全会、日赤、PTAの役も当り前にやりました。私の場合は、言葉よりも信頼関係が先にできて、分からないことも自然に覚えて、地域の訓練や組合の行事にも、いつも皆さんと一緒に参加。日本の標準的な生活習慣を知るとにすみやすくなりました。毎年山本公民館で、国際ふれあい交流会をやっています。今年で15回目になりました。私たちのために、地域が考えてくださることは何よりも嬉しいです。山本インターナショナルも2年前にできました。地元外国住民の友の会です。今フィリピン人と中国人を中心に公民館の行事として活動します。お茶を飲んだり、おしゃべりしたり、軽いスポーツをやったり、山本小学校の子供たちとバンブーダンスや餃子作りを国際的な体験を中心に、新しい発見と実感のある指導をしています。地域の夏祭りも文化祭も、フィリピンの文化の紹介と展示をしています。いろいろな壁にぶつかりながら、仲間達と地域活動をしています。幅広い地域の活動の中に、飯田下伊那フィリピン国籍住民の飯田フィリピンのコミュニティーもあります。カトリック教会を中心に、いろいろな形で活動しています。困っていることがあったら、相談したり、アドバイスしたり、自分たちで解決するよう努力しています。

困っていることがあったら相談したり、アドバイスしたり、自分たちで解決するよう努力しています。

教会の行事やチャリティバザーもやっています。困った仲間も長野のシスターたちを中心にサポートや手伝いをしています。フィリピンの台風の被害者たちのサポートや支援もしています。夜の集まりもあります。

飯田フィリピンのコミュニティーは飯田国際交流推進協会に登録されています。「飯田まつり りんごん」や市民のイベントに参加をして、交流しています。伝統的な遊びや料理もやっています。長野県地域共生コミュニティーがアシスタントでもある。できることをできるときにやっています。

辛いこともあります。やりがいを感じながら自分の不十分な点を勉強しながら人と人のつながり活動に関わり、地域の皆さんと共に生きていきたいです。

【参加者】

ブラジル出身のブラジル国籍です。皆さんのお話をお聞きして、現実それぞれの方、私も含め、海外から来て、狭いようで広いようなこの日本で生活しているんだと、それぞれの気持ちと、本当にそこで生きるための現実を見ながら生活しているんだというふうにつくづく思いました。

生い立ちは皆さんそれぞれあるかと思うんですけども、私もこのような席で、どのような話をすればいいのかなと、最初はもう単純に私が生活している上伊那地域の話をしようかな、簡単にまとめて話ししようかなというふうに思っていたけれども、せっかくの席なので、立場上、私も地元でNPO 法人の役員とい

う立場、そういう職務をさせていただいている中、ちょっと別の背景というか、視点からも話がこの場でできればいいかなというふうに思いました。

皆さんそれぞれ、やはり精一杯試行錯誤をされて生きているかと思うのですが、言葉の壁やら文化の壁やら食の壁やら様々だと思うのです。

私たちNPO法人の傍ら、それに対して一緒にこの地域で共存できるように、「共生」という名前がここに書かれるとおりですけれども、どのようにしていけばいいのかというようなことを考えながら当協会の方が活動して、市民活動から日本語を教えることから始めて20周年を迎えたところであるのですけれども。

年々やはりいろいろな壁に突き当たって、と言えいいのでしょうか。例えば皆さんが話しされたように、労働や教育に関する課題がたくさん残っていらっしゃる。介護というような話も出ました。それに対してもやはり課題がたくさん今後出てくるだろうと、今後の老後をどういうふうに迎えていくんだらうというような心配等もあるだろう。中には皆さんとても地域の方と仲良くやっている方のお話もありました。私もなるべく地域、今後日本で生活する以上は地域と溶け込んで生活しないといけないというふうに思っている傍ら、やはり外国人ということも忘れてはいけません。

ただそれに対してもいろいろな、例えば行政とか、最初意見で述べられたようにいろいろな法律等にぶつかることもたくさんあります。特に近年、この多文化共生というような名前に変わってからは、外国籍の問題というのはいろいろな分野にいろいろな形で課題としてはあるかと思うのですけれども、それがこの多文化共生というくくりになっていまして、簡単なようで難しいような側面もあるというか、そういう問題もあるのではないかなというふうに思ったりもしています。多文化共生というくくりの中、例えば教育問題の話になりますと、その分野だけでなく教育委員会とか、いろいろな分野のところへ通して話を持っていかないといけない。地元の市町村の教育委員会、県の教育委員会とか、そのいろいろな部署をまたがってというような話も出てきまして、とても複雑だと思っています。

そこらへんも県の考え方とか、どういうふうに今後に向け、考えていらっしゃるのかなというふうに思う点、というか心配な点としてはそういうところがあります。

近年リーマンショック以降、大分外国籍の方々が長野県から離れていっている現実もあります。でも、やはりここで何とか頑張ろうというような方々も残っていらっしゃるので、そういう方々に対して、何か発信、この多文化共生というくくりだけでなく発信していけばいいかなというふうに思っています。

まとまらない話で大変恐縮ですけれども、是非、多文化共生という観点から、今後どのようにしてこの外国籍県民の多様な問題を方向付けていくのか、大きな望みとしてはやはりお互い協力し合ってやっていくのがベストなんだけれども、そうは言ってもいろいろな行政の壁やらなんやらというものが正直あります。そこらへんをもう少し、この多文化共生の中で生きる方向性をつけていただければというふうに思います。

【長野県知事 阿部守一】

いろいろな課題と、「こんなことやっています。」というポジティブな話の両方があったと思います。やはり国をまたいで暮らすというのは結構大変なことが多いのだろうなというふうに率直に思います。

先ほど教育の話がありましたが、アメリカは元々多国籍文化なので、学校に行ってもきちんと英語のクラスがあって、日本の学校とアメリカの学校では、アメリカの方がよいという話もあるわけです。私はずっと日本で育って、こうやって長野県の知事としても日本の教育をやっている、そんなこと言われるのは少しまじいかなと思っているのです。

多文化共生、共生社会という話がありました。アメリカと日本は極端な違いがあって、元々いろいろな国から集まって成り立ったアメリカと、元々単一民族とまでは言い切れないけれども、極めて同一性が高い人たちの社会で成り立っていた日本の社会というのは、こういう多文化をどう共生させるかという観点で考えるとかなり違いがあるし、多分日本の方が難しい部分が多いのではないかなというふうに率直に感じています。

今、大きなテーマとして、皆さんがおっしゃっていたことはいくつかの項目に大体収斂されてくるのかなと思って伺っていました。

まず、やはり暮らしていく上では仕事がないという話がありましたし、日本人も外国人も多分この話は同じです。ただ先ほどおっしゃっていただいたように、制度的な違いで外国人の方々が働きにくい、あるいは文化的な違いで困難があるという部分は、そこはある意味でハンディキャップがある部分があるのではないかなというふうに思っています。そこを具体的にどんなものがあって、それをどう縮めていくかということの一つ、考えるべきテーマかなというふうに思いました。

それから、日本語教育とか日本語をどう学ぶかという話。私は、こうして日本語で話してしまっていますが、私がこうやって話している場合、きちんと理解されていますかね。ちょっと分からないという方はいらっしゃいますか。

私がどこかの国に行くと、私なんか中学校から日本の教育で英語教育されていますけれども、未だにネイティブの人たちが会話しているところに入って、これだけ中学・高校・大学と勉強して、その後さらに自分で少し英語の勉強をしたりしたけれども、ネイティブのアメリカ人とかイギリス人とか英語をしゃべれる方とのコミュニケーションは、それでもやはり相当きついです。日本語は特にひらがながあったり漢字があったりカタカナがあったり、結構難しい表記が多いと思うので、そういう意味では、日本語の社会の中でコミュニケーション能力を身につけるといえるのは、かなり大変なのだろうなというふうに思います。そういう意味で、お話があった日本語教育、日本語をどう学ぶかという場づくりというのが非常に大事だろうなと思います。

それから、介護の話がありました。これは介護という話でありますけど、やはり日本語がなかなか十分できない人たちが地域社会にどう溶け込めるかという、介護の側面だけじゃなくて、もう少し広い観点でコミュニケーションがしづらい方たちをどう社会の中で広く受け止めていくことができるかという話だろうとい

うふうに思います。

それからその話とも関連しますけれども、先ほども、いろいろな取組をされている中で異文化の交流であったり、相談窓口であったり、本当の意味での多言語化という話をされていました。冒頭で私が「誰にでも居場所と出番のある長野県にしましょう。」と言いましたが、これは抽象的なスローガンで終わらせてしまっ
てはいけないので。フィリピンの方たちが、一緒に集まってコミュニティーを作
っているということでしたが、日本人でも、外国人の皆さんでも同じ視点だと思
うのですけれど、何でもかんでも行政ができるとか行政が対応できるという話ば
かりじゃなくて、むしろ同じ課題とか悩みを持っている人たち同士がもっと横で
つながった方がいいのではないかなと思います。そういう中で共通の課題を「今
度知事が来るらしいから、あいつは時々しか来ないけれども、言ってやろうぜ。」
などということ、伝えていただければ、「なるほど、それはすぐこうしましょう。」
という話になりやすいし。何よりもそんな同じ悩みを抱えている人たちが話し合
うことが精神的にもいろいろな意味で安定感を持つことができると思います。正
に日本の社会にすごく溶け込んでいただいているなというふうに思ってお話を伺
っていた方もいましたが、そういうアプローチも大事だと思いますし、もう片方
で同じ課題を持った人同士がしっかりつながっていくとか、どっちだけって
ことじゃなくて、両面必要なのではないかなというふうに思います。

最後におっしゃっていた教育の話でも、いろいろな部署が関係していて、県の
教育委員会だったり、市町村の教育委員会であったりして大変だというのは全く
日本人も同じだし、私もそれは大問題だというふうに思っています。我々行政の
側が変えなくてはいけないところがあるのですけれども、教育委員会制度の話も、
小中学校教育だったら県の教育委員会も市町村の教育委員会も両方関わる形にな
っているのが今の制度なのです。

今、長野県では、パーソナル・サポーターといって、困った人の側に寄り添っ
ていろいろな窓口を一緒に回りましょうというようなことをやっています。外国
籍の方にも対応していると思います。言語コミュニケーションがそこまで十分に
できていないかもしれないですけど、すぐ変わらないところもあるので、むしろ
皆さんの側に寄り添うような人たちをもっと増やしていくように、我々行政の側
が変えなければいけないところもあります。

私も、ずっと行政の仕事をしていましたけれども、長野県知事になる前にし
ばらく無職の時代があって、そのとき国民年金の手続とか国民健康保険の手続な
どを自分で市役所に行ってやりました。あっち行ったりこっち行ったり手続させ
られて、私でもよく分からないくらいですから、多分皆さんは大変苦勞されてい
るじゃないかなと思います。だから、そこは行政側がもっと分かりやすく、ワン
ストップでサービスできるように変えていかなければいけないという側面と、も
う片方で皆さんの側に寄り添える人をもっと増やしていくという、両面必要な
だろうなと思います。

皆さんのお話を聞いていて、今日は私が勉強させていただいているのですけれ
ども、せっかくの機会なので、こういうところが課題だなと、少しそれぞれ掘り

下げてみられたらよいなと思うのです。

まず仕事の話が、ありましたけど。働くこととか仕事について、「こんな課題があるよ。」とか、働く場が少ないのではないかという一般論は日本人も今同じ状況ですから、外国人であることによって「こういう文化的なハードルがあるよ。」とか、あるいは「制度的なハードルがあるよ。」というようなことをお感じになっている方がいたら、教えていただきたいのですが、いかがですか。

【参加者】

外国籍ではないのですが、一度ブラジルに移民をしてから戻ってきて、初めのうちは、外国人のための派遣会社で通訳としてお仕事をしていました。そのときに、皆さん、もちろん市民ですから税金を納めることは当然の義務なんですけど、それを怠るっていうのではないのですけれども、結局分からないままに払わないで、そのままになってしまっている人が、たまたますごい滞納をしてしまって、最終的にはお給料を差し押さえられてしまう。そういうことを何人もされているのを知っています。

これは何とかしなければいけないのではないかと前々から思っていたのですが、派遣会社の中にも非常に外国籍の方に対してきちんとしてあげようという方針の会社がありまして、税金に関しても日本の方と同じように特別徴収をしている会社もあるのです。そういうふうに特別徴収をしていけば、もう滞納ということは問題なくなるわけですよ。で、それをなぜ行き渡るように行政が指導できないものか、前から私、疑問なのです。

お仕事が終わって他の所に移っても、他の町に行っても、前住所にあったところは税金が支払い済みということで新しい所に行っても簡単に請求はされないわけですよ。ずっと前から、こういう制度を作ってあげたら楽なのになという感じがありました。その方が、外国人に対しては親切だと思います。

【長野県知事 阿部守一】

具体的で分かりやすいお話、ありがとうございました。

我々は、税金をいただく側なのですが、現状がどうなっているかということ、特別徴収しているところとしてないところと両方あるということですね。それは、実態をよく聞いて、具体的に考えます。確かに制度的にどうやって納税すればいいかわからないときに、申告納税してというよりは、むしろ特別徴収をやってもらった方がいい場合はありますよね。持ち帰って考えます。ありがとうございました。他にいかがでしょうか。

【参加者】

特別徴収というのは会社ができるもので、個人ではできないんですね。個人でいくら12か月分に分けて、払いやすい形で払いたいと言ってもそれは元々法律でできないもので、この場はやはり非常に短い時間の場ですから、先ほど私が言っていたいつでも行政と話ができるというのはまず無理ですけれども、そういった

よつとした相談というのをもっとうまく、絞られた人数でもいいので、キーパーソンの方だけでもいいんですが、そういったのをできたり、もしくは各部署の分かる方を呼んで、外国人のために講座を開いたり、行政が自らやる講座というのは、言いたいことしか言わないので、それより深い話は出てこないのです。私も思うのですが、税金というのは払うべきものですし、考えてみれば、長野県でどれだけ税金を無駄にしているか。どれだけ棚に上げて、結局はもらえないから、これだけ何百万にもなった方をこれは棚に上げて忘れましょうとか。払っている方々の方がバカになってしまいますよね。やはり、もらうべきものはきちんともらう。なら、そのもらうべきお金はどうしたらもらえるか。そういった、やはり外国人の方々もちゃんとした考えやアイデアがあると思いますので、まとまった話でもいいのですが、どこか出す場所を、是非作れたらと思います。

【長野県知事 阿部守一】

キーパーソン・ネットワーク会議というのを国際課でやっているそうだけど、それを教えてもらえますか。

【国際課長 白鳥博明】

ここに出ていただく方にも参加いただいているんですけども、年2回、丸々一日使って朝から晩までキーパーソン・ネットワークの、要するにキーパーソンの方っていうのは地域の代表の方のそれぞれの国の方ですけども、お集まりいただいて今言われたような課題についてお話をします。あるいはまた、そこに参加いただいた皆さんで自由に活発に意見交換をしていただくとか。要するにコミュニケーションをとっていただいて、いろいろなところで問題があったときにその人に聞けば分かる、この地域ではこういうことをやっているけれども、こういうことが解決できるというようなこともやっています。

それから、先ほど地域共生コミュニケーターということもお話が出ましたけれども、今、登録されている方は、300人以上いらっしゃいます。行政とそれから外国籍の皆さんの橋渡しをしていただくということで様々な活動をいただいている方がいらっしゃいますが、やはり若干、活動ができない方もまだまだいらっしゃいます。今までは委嘱状を出してお話をしているだけなんですけれども、そういう方をこれからは、やはり技術の向上も必要だということで研修会等やって技術向上を図って、共にコミュニケーションがとれる、あるいは市町村の皆さんともコミュニケーションがとれるというようなことも考えて、これからやっています。

先ほど国の問題とかいろいろな問題もありますけれども、これもですね、集住都市、要するに外国籍の皆さんが多くいらっしゃる都道府県の代表が集まって、毎年2回、国に要望をしております。

いろいろな課題がありますので、それぞれ長野県だけではなくて、例えば愛知県であるとか静岡県であるとか群馬県、三重県等、そういったところにいろいろな課題がありますので、いろいろな課題を我々も吸収しながらそこに上げて、国

に要望しています。先ほどの税金の問題、それから労働者の問題、いろいろありますけれども、是非外国籍の皆さんに合ったように変えていただきたいという要望もしています。ただ、やはり国には移民法というものがまだできないというようなことがあって、やはり外国籍の方に対するご意見が、国の皆さんも政治家の皆さんにも賛否があって、一本化したものがない状況にあることは事実なので、やはり少し意識を変えていただくということも必要で、我々も要望しているところでございますのでご理解をいただきたいと思います。

【長野県知事 阿部守一】

先ほどおっしゃっていた、例えば税の話が具体的にどういう対応で改善できるかわからないですけれども、個別のテーマは少しずつでも、改善を目に見える形でやっていかないと、いつも同じ話をしてもしょうがないなと思います。それは、キーパーソンの人たちの中でそういう議論はされているのですか。私が課長に質問してもいけないかもしれないけど。

【国際課長 白鳥博明】

まだ始まったばかりなので、具体的に、まず皆さん方に集まっていただくことが重要かなと思ってやっているところなので、是非ご意見をその会議の中でもいただき、アンケートもとっていますので、そういうものを踏まえて、先ほどから様々なご意見があるので、やはり改善すべきではないかと思っています。

【長野県知事 阿部守一】

問題があったら、一気に解決はできないことが多いと思いますが、一步は進んだな、という形に是非したいと思いますので、先ほどの税などの話は、また考えます。

【参加者】

直接、キーパーソンの話ではないですが、地域共生コミュニケーターの登録をし始めてから、もう 12 年以上になります。この長野県の中からもいろいろ、地域で活動できる方々の登録をされているのですが、なかなかそれが周知されていない部分もある。もちろん個人情報の取扱いがどういうふうになるのかという問題もやはり出てくると思うのですが。

とある行政機関から通訳を要請されたんだけど、もちろん身近な団体としては相談は受けましたけれども、人を紹介するというときに当たって、私たちは団体の維持というものも考える中、謝金等は私たちの団体ではどうしても出せないですね。民間の NPO 団体なので。

紹介はできますけれども、謝金等は依頼元の機関の方で何とかできないか。行政区域を渡る関係もあって、地域共生コミュニケーターとか、いろいろな制度はたくさん県としても保持はされているのですがね。ただうまくそれを活用できるような場を、もちろんミーティングっていう形もとても大切なのですが、

それからもう一步本当に踏み出して、本当に稼働できるような、身近で私たちも多分、ここにいらっしゃる方々は善意で協力していきたい、その金銭面とかもちろん生活を抱えている方々もたくさんいらっしゃるのですけれども、善意で集まっている方も多いかと思うのですね。そこをうまく活用できれば本当に理想的な共生を目指した社会になるのではないかと思う部分があるんですね。

こういう言い方はとても失礼だと思うのですけれども、上の方の方々の考え方によって、前に行ったり後退したりってすることは多少あると思うのだけれど、うまく活用できればいいかなという意見です。

【長野県知事 阿部守一】

もう少し具体的に、何を頼まれたときの話ですか。

【参加者】

実を言いますと、市町村の教育委員会の方から、新たに転入されてきた外国籍の方の通訳を頼まれまして、ボランティアで働ける方を紹介する分にはいいんですけども、やはり金銭的な必要が生じてその方にご迷惑がかかるというふうになれば難しいので、何度か県の方にもANPI（公益社団法人長野県国際課協会）にも問い合わせをしましたが、なかなか地域共生コミュニケーターという取扱いも難しい。やはりそれはその各自治体の方で予算をとってくださいというふうな話になって、なかなかうまくいかないものだなというふうな、たまたま最近そのような事例があったのです。

【長野県知事 阿部守一】

分かりました。個別のケースで誰が負担するのかって、結構いろいろあると思うのですよね。だからそれ、行政の側の義務として、例えば教育を受ける子供たちとコミュニケーションをとれるようにするっていうことは、やはりやらなければいけないので。それはどう考えるかという話ですよ。

多分、小中学校の話だと、それはやはり基本的に市町村が考えてもらわなければいけないだろうと私は思うのですけれども、一般的にコミュニケーションができる人たちにどうネットワークしてもらって、どういう形で行政が金銭的な支援も含めてやれるのか、もう少し広い枠組みのことは確かに考えなければいけないと思いますので、いったん課題として受け止めさせていただきます。

【国際課長 白鳥博明】

あとはやはり医療通訳のことも結構ありますので、いろいろなお話を聞きます。どうしても医療の関係というのは難しいので、通訳の皆さん方にやっていただくのですけれども、費用がやはりかかるというようなことで、病院で持っていただく場合もありますが、市町村で持つとはあまり聞かないです。やはりボランティアでやっていただいているということも結構あるというように聞いていますので、そういう認識を我々は持っていますので、是非またご意見をいただければと思い

ます。

【長野県知事 阿部守一】

せっかくなので、少し時間、オーバーしてもいいですか。なるべくいろいろな方にご発言いただいた方がいいかなと思いますけど。教育の問題は、どうですか。

【参加者】

長野県だけじゃなくて日本全国でも、子供が結構多い村なので、去年、うちの子供は小学校3年生だけど、先生がなかなかいなくて、6人も替わったみたいで、ちょっとショックになって、すごく子供たちは不安なので、安心して学校で勉強できるように。

【長野県知事 阿部守一】

担任の先生がコロコロ替わるということですか。

【参加者】

そうです。1年生からね。最初の担任の先生は女性の先生だけど、何か月かすると赤ちゃんができた。しょうがないけれど、後はなかなか先生が見つからない状態で。

【長野県知事 阿部守一】

分かりました。その辺は日本の子供たちも同じだと思います。育休だったり産休だったり取られる先生方がいるので、そういうとき代わりの先生が代用するという事になっているので、そういうことが重なってしまうと多くの先生に教えてもらうことになって、子供たちとのコミュニケーションが続きづらいかも 아닐ですけどね。

そこは、片方で長くしっかり子供に向き合ってもらいたいということと、もう片方で働く先生にも子育てしやすい環境を作らなければいけないので、両立させるのは結構難しいなと思います。ただ、子供たちが安心していられるような環境を、担任の先生との関係だけではなくて、学校全体で作ってもらうようにしていくことは重要だろうと思います。ありがとうございます。

日本語の勉強、結構大変じゃないかと思うのですが。そういうところでもっとこうした方がいいのではないかというような話がありますか。

【参加者】

私たちフィリピン人とタイの人たちとか、漢字がすごく苦手なんです。私も日本語を習いに通っていたんですけども、漢字をどうやって暗記するか、逆に日本人たちは、何で分かるのって思っているのです。

ただ、私の子供たちはもう社会人なので、それはもう何とかやっていけるんですけども、これからの子供たちを考えると、やはり漢字ができないから高校終

わったらもうやめるしかないんですよね。ここにも日本語の勉強のボランティアの人たちも大勢いるのですけれども、もっと漢字と国語の勉強会も開いてもらったらありがたいかなと思います。

【長野県知事 阿部守一】

現状はどうなっていますか。

【国際課長 白鳥博明】

すべて分かっているわけではないですけれども、やはり日本語の教室というのは市町村が開くとか、民間のNPO団体がやっていただくということもあります。それでやはりレベルが違うというようなこともあったりします。参加いただく方もボランティアでやっていただくなかで、これを統一するという事は非常に難しい。例えば市町村でやる場合には雇用されるのである程度一定にできるのですけれども、やはりボランティアでやっていらっしゃる方々については、自分たちでやってもなかなか経費的な問題、費用的な問題があって、思うようにいかない問題があって、すべてがうまくいっているとは言えないと思います。

【長野県知事 阿部守一】

外国籍児童生徒支援員で学校に行かされている方々は、どうすればもっと子供たちに日本語の力を付けてもらえることができるというふうにお考えですか。

【参加者】

やはり学校だけでは。お家の方でポルトガル語をしゃべって学校では日本語というのがあって、さっき私が言ったように語彙の少なさ、そういうのは、放課後の復習がとても必要だと思います。ただそういう復習と言ってもそれを行う場が少し難しいかなと思っています。

【参加者】

私が担当しているところは、さっき言ったとおりに学校だけでは大変だと思いますが、やはり環境づくり。だから子供だけではなく、やはり保護者たちも社会的に地域とか近所の人たちとの関わりを、日本語の環境、日本語教室だけではなく、やはり自分から進んで作らないと、どうにもならないなと思います。

【長野県知事 阿部守一】

我々行政がやらなければいけないことと、それぞれのご家庭でやっていただかなくてはならないことと、社会がどうするかということと、いろいろな角度があるのではないかと思います。そんなに簡単にこれでいいですという話にはなりそうもないですが、ずっと聞いていて、日本語の問題は結構重要だなと思いました。それも我々もしっかり対応を考えるようにしたいと思いますので、よろしく願いいたします。

【参加者】

私は今、子供が4人います。1人幼稚園、2人目は小学生、で中学生、高校生、来年大学生になります。やはり親として、どうやって日本でずっと暮らせるか心配で、それが一番困っています。学校では、子供同士や日本人の親と親同士の問題もあって、どうやって子供を守るか困っています。

【長野県知事 阿部守一】

お子さんが4人いらっしゃるって、上のお子さんは、大学に行かれる年齢で、ずっと育てて、学校に行かせて、日本の学校でもう少しこういうことをした方がいいのではないかなということはありませんか。

【参加者】

自分みたいに困っている外国人、それを誰か助けてくれる、そういうサポーターとか。

【長野県知事 阿部守一】

パーソナルサポートの話をしましたけれども、それは、就職であったり、病気であったり、貧困であったり、そういう複合的な困難の人に寄り添い型で行政の窓口をいろいろつなぎましょうということをやっています。

今のお話は、学校の中ですよ。今、長野県がやろうとしているのは、開かれた学校にしようということで、信州型コミュニティスクールというのを広げていこうとしているのですよ。学校によっては、地域の人たちがいっぱい協力しているところもありますけれども、それはその地域の成り立ちだったり、校長先生のスタンスだったりによって大分違うのですが、要するに、先ほどの話で、自分の子供は自分が守らなければいけないというのは、親として当然の考え方だと思いますけれども、子供たちはやはり地域の宝であって、地域の人たちみんなでもっと支え合って、例えばご両親がいらっしゃる子供とか、いろいろな子供たちもいらっしゃるの、そういう子供は社会全体で支える。学校の中も学校の先生と子供と保護者の関係だと、円滑に行っているときはいいですけども、むしろ学校と保護者が対立構図になってしまうようなケースも最近多いので、そういうところはもっと地域の人たちにも入っていただいて、学校任せではなくてもう少し第三者的な人たちがカバーできるような仕組みを作っていこうということをやっています。今すぐ、直ちにはならないですけども、そういう方向でやっていきたいなと思っています。

【参加者】

日本語の件で大事だと思うのが保育園です。保育園制度というのは、そもそも働いている親達のためなので、片方が働いていないとやはり高額になってしまうんですね。どうか外国人のために特別制度でもあれば、保育園を利用している、

利用していないという小さな点で日本語能力が非常に変わるんです。ただやはり、お母さんが働いていなくて、旦那さんだけ働いて、そんな状況だとどうしても入ってしまうと最高額の4万円くらいになってしまうので、結局入れないでそのまま続けて、いきなり小学校に入れてしまうというケースが非常に多いです。

私も日本語指導員として学校に入ったりしているんですけども、やはり、毎回毎回保育園には入れたいんだが、どうしても金額が高い。そのところをやはり外国人ならではの問題を考えて、言葉の能力を高めるという面で、そういった特別な制度づくりを考えていただければ非常にありがたいなというふうに思います。

【長野県知事 阿部守一】

非常に具体的なお話なので、それも我々は考えなければいけないなと思います。

教育の話は、これは今、来年の予算をどうするかということをやっている中で、長野県は、日本では教育県、教育や人を育てることを大切にしてきた県というふうになんと言われてきた県なので、もっともっと教育をしっかりしていかなければいけないなというふうに私は思っています。

今、保育園の話がありましたけれども、高校の就学支援金制度については、来年度、県の方で財源を出して、国の制度より手厚く保護者の方の負担を減らすような形にしていこうと思っています。

大学についても、いろいろ奨学金とかありますけれども、今、県内の大学に行くときには入学金を少し助成するようなことも考えようかなと思っています。

あと義務教育の小中学校でも課題がありますけれども、金銭的な面でいくと多分、今お話があった幼稚園・保育園のころと、高校・大学のころとが負担感としては大きいので、全体的に考えていこうと思っています。

今のご提案は、外国籍の人にとって保育園は、家庭で日本語のコミュニケーションをとっている人たち以上に、日本語習得という視点で重要だろうというお話ですから、それは我々の方で、そういう視点で組み立てることができるかというのは考えてみたいというふうに思います。

【国際課長 白鳥博明】

他にもご意見はあるかもしれないのですが、ご意見があれば国際課にお話いただいてもいいですし、今日は国際化協会のくらしのサポーターが5人いらっしゃってまして、それぞれブラジル、タイ、フィリピン、中国の母国語でお話ができますので、またご提言等いただければありがたいと思います。皆さん方だけではなくて周りの方もいっぱいいらっしゃると思いますので、お話をいただいて、是非、改善できることはお話していただければありがたいと思います。

【長野県知事 阿部守一】

せっかくなので、くらしのサポーターの人に何か一言ずつ、お話してもらった方がいいですね。

【多文化共生サポーター（中国語担当）】

先ほどいろいろな問題がありまして、私たちサポーターとしては、やはり現実問題たくさん受けています。在留資格の問題、子供たちの教育の問題、連れ子の入学とか、それはできないこと、困っている相談とか、就労の相談とかもちろん、本当に様々な問題を日々受けています。まだそんなに知られていないようですが、是非また困った人いればこちらに電話してください。相談や質問を受け付けています。

《多文化共生くらしのサポーター》

(公財) 長野県国際化協会 (ANPI) 内

長野市大字南長野字幅下 692-2 県庁東庁舎 1 階

TEL 026-235-7186

FAX 026-235-4738

E-mail mail@anpie.or.jp

対応言語

Português (ポルトガル語)、中文 (中国語)、Tagalog (タガログ語)

ภาษาไทย (タイ語)、English (英語)

【多文化共生サポーター（タガログ語担当）】

同じく、国際化協会の多文化共生くらしのサポーターのタガログ語担当です。多文化共生くらしのサポーターは5言語ありますので、フィリピンに関する事、他の言語に関する事も、是非お電話していただければ、また何らかのサポートができるようにします。よろしくお願ひします。

【多文化共生サポーター（タガログ語担当）】

先ほどの教育に関する事なんですけど、今思い出して、以前私も学校に日本語指導員として働いていたことがありまして、多くの児童・生徒が支援を必要としています。フィリピン語、タガログ語に限らず、外国籍児童がたくさんいたんですけど、支援をする人がなかなかなくて。その理由として、最初は例えば1か月間で40時間働くことができるのですが、だんだん時間が減らされて、ある月は例えば4時間にしかならず、支援する人も、どうしても生計を立てなければいけないので、辞めてしまったりしました。犠牲になるのは支援を受けている児童・生徒なんですよね。だからその辺もどうかその人たちのことも含めて、考えていただければと思っています。

【参加者】

文部科学省から特別課程日本語指導の枠が増えるっていう話も出ているので、

そういうところは何とか教育委員会に働きかけをお願いできればというふうに思っています。

【国際課長 白鳥博明】

話しておきます。

【多文化共生サポーター（タイ語担当）】

タイの場合でも、フィリピンと同じ教育の問題があります。それでタイの場合では呼び寄せの子供が多いので、呼び寄せの子の教育問題です。結構大きい子が突然中学校に入学して、日本人と一緒に勉強してあまりできないので高校の進学することも難しいし、もちろん大学とか短大行くのは考えられないくらいのことがありますので、その問題を一緒に考えて少しずつ解決したいと思いますので、皆さんもご協力よろしくお願ひしたいと思います。

【多文化共生サポーター（ポルトガル語担当）】

それぞれの国の独特な特徴があって、ブラジルの場合は主にブラジル人同士で日本に働くために来て。どちらかと言うと、夫婦が日本語がしゃべれなくて、その関係で仕事が不安定になる。それで、あっちこっち県外に行ったり、また帰国したりするために、その子供たちの教育が中途半端になったりということがあります。あとは、経済の課題というのは、年金にはほとんど入っていない方が大勢いらっしゃるの、途中から来ているので、20代、30代。それまでは年金に加入していないのです。これから日本に残る方が大勢いると思います。これから高齢化になる方たちが年金問題はどうか。課題になってきていると思います。また何か相談がありましたら電話してください。

3 知事 結びのあいさつ

【長野県知事 阿部守一】

それでは、今日は皆さん、ありがとうございます。予定の時間を40分近くオーバーしてしまって、大変申し訳ございません。

今日は、どちらかと言うと私が勉強させていただいたという感じで終わってしまっていて申し訳ないのですけれども、皆さんの思いを私もしっかり受け止めて、具体的なご提案も幾つかいただきましたので、できるところから改善できるように努めていきたいというふうに思います。

こういう形で私が出てきて集まらなくても、誰かファシリテーターをやってもらって、何かこういう課題があるよと、こういう方法がいいよということをして是非、集約して私のところに上げてもらうように、国際課長は、そういう仕組みを考えてください。そうしないと、いつも私が出てきて、こういうことをやって、せっかく本質的なところに行きかけたなと思ったら「もう時間だからごめんなさい。」となるのは、心苦しいので、その仕組みを是非作ってもらいたいと思います。

長野県は、私は日本の中でも本当に素晴らしい県だというふうに自負しています。皆さんも地域の中で、様々な課題があると思いますけれども、是非、この長野県をより良い県になるように協力していただきたいと思いますし、また皆さんの声を我々もしっかり受け止めて、課題を一步一步着実に解決できるように取り組んでいきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

今日は、ありがとうございました。傍聴の皆様方も長時間お付き合いいただきまして、ありがとうございました。

長野県は、去年交通事故の死者数がちょうど 100 人でした。一昨年は 100 人を切っていたのですが、去年は少し交通事故の死亡者数が増えました。是非お帰りは、お帰りだけじゃなくてこれからずっと、交通事故には気をつけていただければと思います。どうもありがとうございました。